

第2節 ベトナムの遺跡出土の肥前磁器

Trinh Cao Tuong (チン・カオ・トオン)
(ベトナム考古学研究所)

1 はじめに

大橋康二氏の『海を渡った肥前のやきもの展』によると、一艘のホランダ商船が1650年に長崎港から北圻（現在のハノイ）に145個の粗製陶磁器をこの地の商館に運んだという。おそらくこの商船は、日本陶磁器を運んだのであろう。一年後の1651年には別のオランダ商船が176個の日本製陶磁器、粗製の碗や皿、瓶を商館に運んだという¹⁾。

1990年に長谷部楽爾教授（出光美術館顧問、恵泉女子学園大学教授）が“古都市ホイアン”に関する国際会議に参加されたおり、ホイアン市文化課が展示していたホイアン出土陶磁器のケースのなかに肥前陶磁器片を確認された。そして、九州陶磁文化会館に機会があったらより正確に調べてほしい旨を報告された。

その年の末に、長谷部氏を団長とする日本人研究者チームとベトナム考古学研究所との間で5年間にわたる“ベトナム古陶磁”の研究のために、氏はベトナムを再訪問された。残念ながら、その年の研究計画のなかにはホイアンははいつていなかった。

1993年春の調査のなかで、昔のタインハー（Thanh Ha）港であるトゥアティエン・フエ（Thua Thien-Hue）省フォンチャ（Huong Tra）県フォンヴィン（Huong Vinh）社のミンフォン（Minh Huong）村のザン・ダオ・トン（Giang Dao Thong）氏の庭先で調査団は肥前磁器片を多数発見した。また、フエ王宮博物館（旧カイディン博物館）の収蔵庫でも、中国陶磁器とみられていた陶磁器のなかに、調査団の一員である西田宏子博士が肥前磁器を確認された。さらに南部の調査のなかで、ホイアンやチュンフォン（Trung Phuong、クアンナム省）などで肥前磁器片を確認した。

この調査以降にも、ベトナム・日本の各研究者はベトナムの各地で肥前磁器を確認し、また以前に中国陶磁器として収蔵された陶磁器のなかに肥前陶磁器のあることを再確認した。1998年3月現在、わたしたちは以下のような遺跡で肥前陶磁器を確認している。

2 ベトナムの遺跡出土の肥前磁器

博物館所蔵の肥前陶磁器はここでは除外し、遺跡出土肥前磁器を北部から紹介する。

北部

1) 大橋康二
『海を渡った肥前のやきもの展』九州
陶磁文化館

- (1)ホアビン (Hoa Binh) 省キンボイ (Kim Boi) 県ヴィンドン (Vinh Dong) 社ドンテック (Dong Thech) のムオン (Muong) 族古墓群
- (2)ハイフン (Hai Hung) 省ナムサック (Nam Sach)、チュウダオ (Chu Dau) 遺跡
- (3)ハイフン省チーリン (Chi Linh) 県ランゴム (Lang Gom) 遺跡

中部

- (1)クァンチ省ゾーリン (Gio Linh) 県マイサー (Mai Xa) 港跡
- (2)クァンチ省ティユホン (Trieu Phong) 県ティユアン (Trieu An) 社クァヴィエット (Cua Viet) 港跡 (手塚直樹隊発見)
- (3)クァンチ省ヴィンリン、フックリー窯跡群 (菊池誠一発見)
- (4)トゥアティエン・フエ省フォンディエン県ミースエン窯跡群
- (5)フエ市フォンチャ県タインハー港跡 (長谷部楽爾隊発見)
- (6)ホイアン市内遺跡群 (昭和女子大学隊発見)
- (7)クァンナム省ディエンバン (Dien Ban) 県タインチェム地点 (広南営跡、昭和女子大学隊発見)
- (8)クァンナム省ディエンバン県ドンズオン (Dong Duong) 遺跡 (チャンパ都跡、昭和女子大学隊発見)。
- (9)クァンナム省ディエンバン県ノイザン (Noi Rang) 地点 (昭和女子大学隊発見)
- (10)ビンディン省トゥイフォック (Tuy Phuoc) 県フォッククァン (Phuoc Quang) 社ヌックマン (Nuoc Man) 港跡 (長谷部隊発見)
- (11)ビンディン省アンニョン (An Nhon) 県ニョンタイン (Nhon Thanh)、トオックロック (Thoc Loc、フーロックPhu Loc) 塔 (菊池誠一発見)
- (12)ビンディン省タイソン (Tay Son) 県タイビン (Tay Binh)、アンチャイン (An Chanh)、ズオンロン (Duong Long) 塔 (菊池誠一発見)
- (13)ラムドン (Lam Donh) 省バオロック (Bao Loc) 県ダイラン (Dai Lang) 古墓群
- (14)ラムドン省バオロック県ダイラオ (Dai Lao) 古墓群
- (15)ラムドン省ラムハー (Lam Ha) 県ダイドン (Dai Donh) 社古墓群

南部

- (1)バーリアーヴンタウ (Ba Ria・Vung Tau) 省コンダオ (Con Dao) 県イギリス東インド会社跡地 (長谷部隊発見)

ベトナムで出土した肥前陶磁器は、ホイアン市内の遺跡群をひとつとして数えた場合、全部で19遺跡を数える。しかし、ホイアン市内の遺跡群を各地点別でわけた場合は9地点であるため、すべての遺跡数では28遺跡を数えることになる。

ではつぎに、各地の発見の肥前陶磁器に関して、若干の考察をおこないたい。

3 分布の特徴

わたしたちがすでに上記で公表した肥前陶磁器出土遺跡の分布は、北部から南部、そして山地地帯からデルタ地帯、また遠い島嶼部へと広がっている。肥前陶磁器はベトナム人だけの好みとして使用されたばかりではなく、ベトナム少数民族（ドンテック、ダイランなど）の貴族層の副葬品としても使用されている。また興味深い現象として、チュウダオやミースェンのような陶磁生産地にも出土していることである。

ベトナムの遺跡出土の肥前陶磁器の分布から、それが昔のベトナム人の各階層の好みの商品としてばかりではなく、市場における強力な競争力をもっていたのであろう。

しかしながら、上記28遺跡のうち北部で出土した肥前陶磁器は3遺跡しかなく、あとはすべて中部・南部地域での出土である。この現象には多くの理由があるだろうが、つぎのふたつの理由が思い浮かぶ。

ひとつ目の理由として、17世紀代の北部には有名な窯場が多数あるが、この時代には中部・南部において磁器生産地の遺跡がまだ確認されていないことである。他面、この時代はベトナムが南北に分断され、交易関係が中断し、北部の陶磁器が中部・南部市場にはいることはほとんど不可能であった。そのため、ダンチョン（阮氏治下の中部ベトナム）では肥前陶磁器や中国陶磁器の輸入により門戸を広げたであろうことは、理解しやすいことである。

もうひとつの理由として、ダンチョンの阮氏政権の海外交易政策がダンゴアイ（鄭氏治下の北部ベトナム）の鄭氏よりもより開放的であったことであろう。そのため、肥前陶磁器がダンチョンの市場にはいるのがより有利な状況であったのであろう。このことは、考古学資料から確認することができる。現在までのところ、肥前陶磁器がもっとも多く出土している遺跡は中部の港跡であるタインハーとホイアンである。その当時の北部の港であるフォーヒエンからは、わたしたちはまだ一片の肥前磁器も確認していない。

当然のことながら、上述した理由は推定の粋をでないが、より慎重な方法で考究していかなければならない。

4 ベトナム出土の肥前磁器の特徴と年代

ベトナムの各遺跡出土の肥前陶磁器はかなり豊富であり、碗や皿、瓶などの日常生活用具が主要なものである。そしてそのほとんどが青花である。現在までのところ、色絵はビンディン省のヌックマン港跡などでわずかに発見されているだけである。

文様に関しては、一般的に魚、波、龍、鳳凰、花、“日”字などがある。このような文様のほかに、帆掛け舟や水鳥と蝶の文様、花瓶、鋸歯紋などもみられる。

つぎに、ベトナム出土の肥前磁器の年代に関しては、主要な時期は1640年～1680年代のものである。ただし、ダイランの古墓群出土の1片やタインハー港跡

で発見された若干の破片はやや新しく1690年代から18世紀前半の頃とおもわれる。

ところで、1636年は朱印船制度の最後の年である。その後、徳川幕府は鎖国制度を開始した。そのため、日本商船によるベトナムへの肥前陶磁器の運搬は難しいであろう。徳川幕府の鎖国政策のおかげで日本にあるオランダ東インド会社がこの時代の日本と東南アジア諸国との貿易の仲介人としての役割を担ったのである。

大橋康二氏の資料によると、オランダ東インド会社の船が最初に陶磁器をトンキンに運んだのは1650年のことであるという。また、大橋氏引用の山脇倭二郎氏の説によると、1647年に長崎港からシャム経由でカンボジアに行く一艘の中国船が「粗製の磁器176俵」を積んでいたという。

このことに関して、ホアビン省キンボイのムオン族の貴族墓から出土した肥前磁器は興味深い資料である。肥前磁器を副葬品とした墓には石の墓標があり、文字が刻まれている。それによると、埋葬者であるディン・ヴァン・キーは「壬午八月二十六日」（1582年）生まれで、「丁亥年十月十三日丑時終」（1647年）に亡くなり、「庚寅年二月二十二日」（1650年）に埋葬されたという²⁾。ムオン族には死者が生前に使用していた用品だけを副葬する習慣がある。ディン・ヴァン・キーが亡くなった年は1647年である。そのため、肥前磁器がベトナムに輸入されたのは、おそくとも1647年と考えられる。あるいは埋葬される以前と考えることも可能であろう。そのため、オランダ東インド会社以外に中国商人もまたベトナムに肥前磁器を運んでいたのであろう。

2) LE DINH PHUNG・PHAN TIEN BA 1986
KHU MUONG DONG THECH (HA SON
BINH) .
(ハソンビン、ドンテックのムオン
族古墓群) . KCH3 : 43-51

5 おわりに

頁数の関係で、わたしたちはベトナムの肥前磁器に関する基礎的な情報を提示するだけにとどまった。遅くない時期に、ベトナムと日本の考古学研究者たちの協力の結果実現できる『ベトナム発見の肥前陶磁』という書物のなかで詳細に報告し、みなさんにお届けできることを希望したい。

(訳：菊池誠一)

(訳者注：頁数の関係で、本文の一部と参考文献を割愛した。なお、ムオン族の資料に関して、輸出初期の肥前陶磁器の実態を考えるためにも重要なものであり、1998年9月にハノイ国家大学・ホアビン省博物館・菊池の合同で、出土遺物の再調査を実施する予定である。)